中間報告書
第二回（2013 年 1 月 1 日～3 月 31 日）

国際ロータリー第 2690 地区
2013-2014 年度地区補助金奨学生
海野　歩未

デンマークでの生活について

デンマークに来て早半年が過ぎようとしています．新しい出会いと刺激の毎日はあっという間に過ぎていくことを実感します．特にこちらに来て最初の 3 カ月は精神的にも肉体的にも試練の日々であり，怒涛の如く過ぎ去ったように思います．文化の違い，風習の違い，慣れない言語，沢山の分からないこと…．それでも一つひとつのことに対して自分なりに考え，チャンレンジし，時には人を頼り，失敗したり，励ましてもらったりしながら，分かったこと出来たことを確認し吸収していったように思い返します．ようやく周りの状況が見えるようになり，言葉にも慣れ，生活に少しずつゆとりが生まれてきています．この国で，この文化の中で，この国の人達に囲まれながら自分の存在意味や，自分にできることを考え行動に移していくことを考えています．

デンマークに寒く暗い冬がやってきました．朝は 9 時頃にようやく明るくなります．明るくなるといっても太陽は顔を出しません．厚い雲が空全体を常に覆っているので，どんよりした明るさが続きます．そして午後の 3 時頃から日が暮れすぐに暗くなります．気温は 0℃前後で，雪や霙，雹もよく降ります．私は毎日大学へ自転車で通っているのですが，ズボン・靴下・手袋は二重履き，スキー用の服を着用しなければ凍えて外には出られない状況です．デンマーク人も同じように防寒して自転車に乗っています．路面が凍結したり雪が積もっていたりすることもあるので，気を付けて走行しなければいけません．通学途中の湖は完全に凍り，鳥達はお腹を空かせているようでした．

（コペンハーゲン中心部の湖 Søerne）

こんな寒くて暗い季節でもデンマークの人達は屋内で快適に過ごす方法を知っています．家だけでなく，会議やセミナーなど人が集まる場所では電気ではなくロウソクに火を灯し，暖かい飲み物や，甘いものを食べます．誰もがリラックスして，そのゆっくりした時間と雰囲気を心地よく感じて過ごすのです．『のんびりしているなぁ』と思いましたが，この季節を穏やかにのりきる彼らなりの知恵なのでしょう．実際にはこの太陽が全く出ない時期をストレスに感じる人は多いのだそうです．晴れの国岡山で十分太陽を浴びて育った私自身はこの数か月の暗い生活は全くストレスがなく，逆に新鮮に感じられました．

学業面での成果

少しずつですが，自分の研究活動が軌道に乗り始めたように思います．私の研究プロジェクトはデンマークと日本の小学校において行われます．デンマークの子どもは世界でもっとも自分のことを幸せだと感じていると言われています．一方で，日本の子どもは世界で最も自分のことを孤独だと感じているという調査結果があります．この大きな違いはとても興味深いと思います．

二つの国は教育制度，文化，歴史など様々な点で異なっています．しかしインクルーシブ教育を取り入れようとしている点で共通しています．ここでインクルーシブ教育 Inclusive education について少し説明したいと思います. 文部科学省は「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い，人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」と説明し，特に教育現場では障害のある子どももない子どもも共に学び，子ども一人ひとりの能力や可能性を最大限に延ばし，必要な教育的支援や環境を整え，彼らの共生社会を支える考え方として知られています．

（心理学科の自分のオフィスにて）

私の研究プロジェクトではまず両国の子ども達が自分自身のことをどのように思い感じているか（自尊心）を調査することから始まります. 次に両国の小学校のクラスで障害のある子どもとない子ども両方に, 自分の得意なことを生かして互いに助け合う独自の活動に取り組んでもらいます. インクルーシブ教育の一つの問題として障害のある子どもが通常のクラスの授業内容が理解できなかったり, 互いにやりとりすることが難しかったりする点が挙げられています．様々な個性や特性がある子ども達に同じ学習内容を同じ方法で理解させることや，同じ理解レベルを求めることには限界があると私は思っています．しかし，障害のあるなしに関わらず誰でも自分の得意なことはあります．それで誰かを助ける，誰かの役に立つことをするのは誰にでもできます. “自分の強みを生かして周りの役に立つことをする“ということは社会参加して働き貢献することと同じことです. この活動を通して，子ども達の自尊心がどのように変化するかを調査し，そこから今後のインクルーシブ教育において重要な点について示唆する予定です．

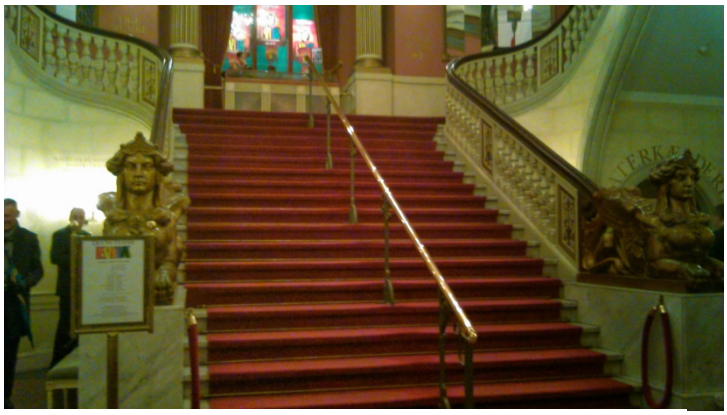
直面した課題，問題点等

この研究に取り掛かるにあたって，まずはデンマークの小学校で私の研究に協力してくれる学校を探さねばなりません．これはとても大変な経験でした．学校側からすると，よく知らない国から，デンマーク語を話さない別の人種に警戒するのは当然のことのように今になってみると理解できます．何度も学校に連絡をし，何度も学校を訪れ，何度も関係者と話をしても，なかなか前向きな答えが得られない時には，海外で現地調査することの難しさをひしひしと感じていました．数か月経ってようやくある小学校の校長先生がその学校で研究することの許可を下さいました．私はなぜこの研究を受け入れてくれたのか，その理由を聞きました．校長先生は「地球の反対側の国から，この小さな町の私たちの学校にわざわざ来たあなたの熱意に感銘を受けたのよ．それにあなたの研究はとても興味深いわ.」とおっしゃって下さったのです．研究はスタートを切ったばかりです．日本国内では味わえなかった苦労とやりがいを感じています．

デンマークという国はある側面においてとても閉鎖的であると聞きます．デンマーク語を話し，自分達の文化や歴史を共有できる者でなければ立ち入ることができない“輪”のようなものがあるということは，デンマークに暮らす外国人の間では有名な話です．しかし，デンマーク人は決して排他的ではないと私は感じています．彼らはとても素直で，偏見や周囲の意見に流されることなく，個人個人が色々なことを自分のこととして考えて責任をもって自分で判断する姿勢をもっています．おそらくこの学校の先生方も私の研究について，真摯に受け止め考えてくれたのではないかと思います．それはとても有難いことでした．そして，後になって分かったことなのですが，デンマーク人はとても“のんびり屋さん”です．日本人がせっかちなのかもしれませんが，彼らの時間の流れるスピードは私達のとは全く異なっています．なかなか返事がもらえなかったり，手続きが進まなかったりすのは，彼らが難色を示しているからではなく，これが彼らの仕事のペースなのだと分かったのです．それでも労働生産性は日本よりもはるかに高いのですから驚きです．

受入地区でのロータリーとの関わり，奉仕活動等

継続して毎週開催されるディナー例会に参加しています．ロータリアンの方々には随分と私の顔を知ってもらうことができ，学業面の話などをさせて頂いたり，時には彼らの人脈や多くの情報を提供して下さったりすることもあり，大変感謝しています．またカウンセラーの Ole（オール）さんの紹介で，デンマークと日本の文化交流を促進している主にデンマーク人による団体の人のお話を聞いたり，コペンハーゲンにある東海大学ヨーロピアンセンターで 3 月 11 日に行われた東日本大震災メモリアルイベントへ一緒に参加させて頂いたりしました．更に，コペンハーゲン国際ロータリークラブのはからいでロータリアンのお宅で開催されたクリスマスパーティやデンマークでも格式高い劇場で行われたミュージカル「エビータ（EVITA）」へ招待して頂きました．華やかな会場には美しいドレスやタキシードを纏った紳士淑女や皇室関係者，振る舞われるシャンペン…まるで映画の中と見紛



（劇場と劇場内部の階段 Det Ny Teater）

う程の光景が広がっていました．Ole さんをはじめコペンハーゲン国際ロータリークラブの皆さんには本当に沢山の貴重な経験をいつもさせて頂いています．

私は日本にいる時は臨床発達心理士，特別支援教育士の資格を生かして，子どもの発達相談，教育相談，子育て支援活動を行ってきました．その経験を生かして，デンマークおよび周辺国で生活する日本人家族に対する臨床活動を始めました．デンマークに暮らす日本人家族が子どもの成長発達に関する心配事や言葉の問題，デンマークと日本の教育方針の違いなどの悩み事を抱えているという話を聞いたことがきっかけでした．彼らは日本語で相談が出来て，日本の教育や子育てに関する知識のある人を必要としていました．まだ始めたばかりですが，現地の人達のニーズを聞きながら私にできることを提供してきたいと思っています．

また，この他にもデンマークの日本人会の会報誌に私のデンマークにおける子育てや教育に関する記事を掲載させて頂いたり，私が大相撲ファンだと聞き Ole さんの紹介でデンマークに暮らす日本の大相撲ファンの会に参加し一緒に春場所を楽しんだりしました．

今後の目標

まずは自分の研究を一つひとつ着実に取り組んでいこうと思っています．協力してくれる学校が決まったので，今後の計画や方法などについて学校の先生方と確認し，よりよい成果が得られるよう進めていきたいと思います．多くの論文を読んだり，翻訳（英語，日本語，デンマーク語）をしたり，自分の研究を練り直すのは本当に根気が必要な過程ですが，自分の興味があることを追及し新しいことを知り自分のアイディアを磨き，そしてそれを人に伝える大事な任務だと自覚してやっていきたいと思っています．スーパーバイザーの Jesper（ヤスパー）先生には，「一つひとつの課題をやり進めていくことで，君は優秀な研究者になる」といつも励まされています．

また，デンマークにおける発達障害のある人の教育体制，就労体制について学びたいと考えています．障害のある人が彼らの能力をどのように生かし社会参加を促進し，彼らがそれをどのように考えているかを実際に当事者に会って話を聞きたいと思っています．特別支援学校や，自閉症の団体，自閉症の人を多く雇用している企業などに連絡を取り話を聞かせて頂く予定です．もし可能であれば，そこで私にできるボランティア活動，奉仕活動にも積極的に取り組みたいと思っています．